

小石川植物園旧蔵「梅花図譜」について

平野 恵

はじめに

筆者は、旧著『十九世紀の園芸文化 江戸と東京、植木屋の周辺』¹において、豊富な番付・図譜が現存する変化朝顔や、菊花をもって造形する菊細工の番付などを題材として、近世後期から近代初頭の園芸文化について論じた。他の園芸品種に比して変化朝顔や菊は例外的に図譜・番付が多い点にも言及したが、²その他の園芸植物については、個々に検討を加えていき、資料ごとにデータを蓄積していくしかない。本稿で採り上げる梅花についても、本草・園芸書には、必ずといってよいほど記載がある一般的な植物であるが、梅花のみを扱った園芸書は殊の外少ない。こうした意味で、本稿で検討する史料、小石川植物園旧蔵の梅花図譜は、近世後期の園芸文化の新たな一側面を明らかにできると考える。

現在、東京大学大学院理学系研究科附属植物園（小石川植物園）に原本は存在せず、複数機関に写本として伝わるが、内容まで採り上げた論考はなかった。成立年代は不明とされ、138種の梅花が描かれ（うち11種は図のみ）、傍らに品種名、遅咲きか早咲きかなどといった簡単な情報と梅花の所有者名を記す。所有者には、『韻勝園梅譜』著者、春田久啓や大名・旗本の本草研究会しゃべんかい、緒鞭会一員の馬場大助など、園芸文化史上の著名人名が見受けられ、その他の人名にも旗本身分が多いことが判明した。そこで本稿では、ここに登場する人名の存命あるいは在任期間の確認を行い、史料の成立年代を明らかにするのを目的とする。同時に、誰が何の目的で本梅花図譜を制作したのかについても考えていきたい。

1 思文閣出版、2006年

2 拙稿「江戸の園芸文化と百花園—変化朝顔を中心に—」（『江戸の花屋敷 百花園学入門』所収。向島百花園サービスセンター、2008年）

1. 書誌検討

本稿で扱う写本の史料は以下の4点である。

- ①国立国会図書館蔵『梅花正写』【請求記号:特1-62】
- ②東京大学附属図書館蔵『梅花正図』【請求記号:T83-176】
- ③名古屋大学附属図書館蔵『錦窠植物図説』巻41
【請求記号:W470.3. I-57】
- ④雑花園文庫蔵『梅花正図』



図1 東京大学附属図書館蔵『梅花正図』



図2 名古屋大学附属図書館蔵『錦窠植物図説』巻41



図3 雑花園文庫蔵『梅花正図』

①は、植物病理学者である白井光太郎旧蔵本で、第20丁裏に、

小石川植物園所蔵原本ヲ以テ農学士松田秀雄氏に嘱して謄写せしめ珍蔵す

白井礫水

とあり、さらに最後尾の第23丁裏に、

大正二年七月

小石川植物園所蔵本ヨリ転写

とあり、大正2年(1913)7月に、白井が小石川植物園蔵本を松田秀雄に委ねて写させたとわかる。なお、本写本は、他の3冊とは異なり、名称がなく図のみの11種の梅図を欠く。

②は、「韻勝園梅譜」「名所草木考 梅部抄」とともに合綴された書物で、2007年、東京大学総合図書館における記念展示「世界から贈られた図書を受け継いで」によってその存在を知った。中表紙の扉題には、

梅花正図 其数一百三十八図アリ。惜哉末ノ十一ハ名称ナシ。

とあり、第20丁裏に、

明治廿三年六月、蒔田厚德氏ノ本ヲ借写ス。

田中芳男

とあり、明治時代の官僚・田中芳男が、明治23年(1890)6月に蒔田厚德に写させたものである。本書は、田中芳男旧蔵書を田中美津男が昭和6年(1931)東京大学に寄贈した田中芳男文庫中の一つである。

本写本は、第77番目の梅「加賀梅」の名称を写し漏らすなど写本としての信用度は低い。ほかにも第34番目の梅「緋竜梅」において「名谷十蔵花」と記されるが、実は「石谷十蔵」が正しく、「石」を「名」に読み誤り、また、第93番目の梅「長谷川梅」には「春田花」という情報が欠けている。あるいは写本を更に転写した可能性もある。

③は、幕末から明治時代に活躍した本草・植物学者である伊藤圭介の百科事典的な書物(全188冊。他に『錦窠魚譜』『錦窠蟲譜』『錦窠動物図説』『錦窠獸譜』がある。伊藤圭介文庫)で、冊ごとに植物の科名で分類し、近世～明治の史料の写しあるいは原史料、圭介自身の手稿を貼り込んだ一種のスクラップブックで、第41冊目が「梅譜」である。冒頭に、

^(ママ)小石植物園ノ巻物ノ抜写也。例ヘハ五六リンアル花ノ枝ヲ一リン写タル也。

とあり、小石植物園とは、小石川植物園のことを指し、「御薬園」の語を用いていないので、写本成立時期は明治以降である。図の出来が最も美しく仕上がっているが、他写本では124番目に描かれる「有明」が、最後尾の137番目に描かれるなど梅図の順番に異同が多い。

④は、園芸研究家・小笠原左衛門尉亮軒氏の所蔵本で、前3点と異なり、覚え書きの類はまったくなく、写した時期・人物名ともに不明である。「石」と「名」の誤り、「春田花」を欠くなど記事の書き方は②東大本と同じであるが、「加賀梅」の名称は記されている。こちらも、②東大本同様、写本をさらに転写した可能性がある。

写本4点のうち、写本成立年代がはっきりしていて最も古いのは、明治23年に写させた②東大本である。あるいは年代ははっきりしないが、明治34年に没した伊藤圭介が写させた③名大本がそれより以前の可能性も考えられる。4点の写本は、②東大本と④雑花園本が同系統の本から書写されたと考えられるが、記事の信用度は、①国会本や③名大本に劣る。③名大本は、他本にない「巻物」という原本の形態の情報が含まれるなど原本書写の可能性が最も高いが、最後尾に登場する梅「座論」の説明が他本には詳細に記されているのに対し、「同」とあるのみで、冒頭に「抜写也」とあるとおり書写者によって記事を抄録した可能性が高い。以上のことから、情報量が多く、かつ順序において齟齬が少ないのは、①国会本である。ゆえに、以下の引用では特に断らない限り、国会本を用いることとする。

2. 人物の検討と成立年代

各花の所有者名をピックアップした結果、表1のとおり、28名の人物が登場する。

まず目を惹くのは、将軍が2名登場する点である。1人目は、第26番目「重ノ梅」において「俊明君御銘」とある「俊明君」で、この人物は、諡号が「俊明院」である徳川10代将軍家治(1737-86)のことであろう。2人目は、「有徳君」すなわち「有徳院」の諡号を持つ8代将軍吉宗(1684-1751)である。第9番目「唐梅」では、「有徳君御手継」の梅と説明され、41番目「御酒の梅」では「有徳君御酒ノ内二入レサセ玉フ」ゆえにその名が付いたとある。2名ともに、没後に贈られ

役職	人名	登場回数	梅花銘
将軍	有徳君	2	唐梅・御酒の梅
	俊明君	1	重の梅
大名	立花出雲守	3	梓弓・有明・笠取山
植木屋	染井喜兵衛	1	雪柳梅
藩士カ	戸田主税	1	難波梅
医師カ	服部玄良	3	千代鶴・菅原・右近
不明	石谷十蔵	1	緋竜梅
同心	山田平右衛門	1	仙鏡梅
旗本	春田四郎五郎	16	八重児紅梅・雪柳梅・鶯舌梅・緋櫻梅・長谷川梅・月宮殿・飛燕梅・流芳梅・蝶千鳥・宮錦・大和錦・千鳥・浮草・仙鏡梅・江南梅・仙掌梅
	堀弾正	10	雛雲・駅路ノ鈴・満月・夏衣・都ノ富士・鞠子梅・緋櫻梅・紅葉賀・月宮殿・月笠
	山中平吉	5	奈良ノ都・小河・初霜・三笠山・加陵類
	馬場大助	3	朝鮮梅・鶯宿梅・雪ノ笠
	阿部主膳	3	梓弓・有明・笠取山
	坂部善次郎	2	猩々紅・夾竹梅
	土屋源四郎	2	雛鶴・薄化粧
	彦坂三太夫	2	櫻梅・和泉紅梅
	岩本石見守	2	清光梅 (2箇所に掲出)
	青山牛太夫	2	座論梅・座論
	斎藤伯耆守	1	唐梅
	本多百助	1	鉄拳梅
	進喜太郎	1	軒端梅
	安藤弥右衛門	1	とめこかし
	小出宮内	1	八つ藤
	稲富久兵衛	1	未開紅
	篠山吉之助	1	初霜
	小菅猪右衛門	1	月宮殿
大久保矢九郎	1	紋隠し	
蜂屋七兵衛	1	笠取山	

表1 梅花所有者名と身分

る諡号で記載されるので、本図譜成立時には既に没していたことはいうまでもない。

染井喜兵衛というのは、染井村(現、豊島区染井)の植木屋・高木喜兵衛と考えられる。高木喜兵衛は、近くの伝中(現、文京区本駒込と豊島区駒込の境付近の里俗名)にも居住していたのでまぎらわしいが、同姓同名の別人である。どちらも菊細工を手掛け、明治維新以降も活躍し、明治10年に開催された第2回内国勸業博覧会に出品している。

人物が特定できない3名のうち、戸田主税助は同名の松本藩藩士がおり、服部良玄は服部了元という医師の血縁かと疑われる。そのほか立花出雲守、

つまり陸奥下手渡藩藩主である立花種周（1744-1809）かもしくは立花種恭（1836-1905）という大名身分の者、山田平右衛門という小石川薬園の栽培に従事した幕臣³がいるが、本史料の最大の特徴は、そのほか20名という多勢の旗本身分の者が梅栽培に従事していたという事実である。そこで『江戸幕府旗本人名事典』⁴『寛政譜以降旗本家百科事典』⁵『柳営補任』⁶を参照して、各旗本の没年がわかればこれを優先し、不明であれば役職を辞した年を列举して、本図譜に登場する人物の生存年代を検討していく。

春田四郎五郎は、四郎五郎久啓のことで、禄高450石、天保11年(1840)職を辞している。その著『韵勝園梅譜』に文化8年(1811)に記された後序には、
（前略）亦有以哉余少有梅癖自都下名園至郊野江山每見佳品則接枝以養之分根以植之、又春間取捨埋之于地数年之後始者花莫花則撰其佳品名其佳号故他園未嘗有者已則数品焉。（後略）

若い頃から「梅癖」があり、都下名園や近郊の野を見る毎に佳品を接木して栽培し、失敗を繰り返しながら、数年後にはよい花を得たので、「佳品」を選び「佳号」を名付け、他の園にかつてなかった新花も数品得たという。このように梅花を多く所有し、自らが新花をつくり命名したことで有名な人物であった。没年は未詳であるが、文化・文政期に活躍した。本図譜でも計16の品種に名が登場し、この数値は他と大きくかけ離れて最多を誇る。ただし、本図譜では、例えば第68番目の梅「雪柳梅」において、

春田四郎五郎ノ銘
シタレ月影
染井喜兵衛より

とあるとおり、春田が命名したのみで梅花自体は別の人物が提供している。この例のとおり、人物名が記載されていても、必ずしも図譜制作時に存命とは限らない点に注意したい。

3 大場秀章編『日本植物研究の歴史 小石川植物園300年の歩み』33頁、東京大学総合研究博物館発行、1996年。「江戸城多聞櫓文書」によると、安政2年時で歳75歳とある（『改定新版江戸幕臣人名事典』、新人物往来社、1997年）。

4 小川恭一編著・石井良助監修、原書房発行、1986-90年。

5 小川恭一編著、東洋書林発行、1997-98年。

6 東京大学史料編纂所編『大日本近世史料 柳営補任一～六』東京大学出版会、1963-69年。

堀弾正は、禄高1,300石、求馬定成のことで文化12年に没。

山中平吉は、禄高1,000石、平吉輔俊のことで文政10年(1827)の『国字分明集』に名が載る。

馬場大助は、2,000石、文久2年(1862)に隠居し、没年は慶応4年(1868)。天保初年に本草研究会「楮鞭会」で活動し、また嘉永5年(1852)序『群英類聚図譜』、安政2年(1855)に『遠西舶上画譜』など美しい図譜を制作したことで知られる。

安倍主膳は、主膳信旨と思われ、禄高1,500石、享和3年(1803)辞職。本図譜では、第44番目「梓弓」と第123番目「有明」に記載があるが、両品ともに立花出雲守の花とあり、立花家と関係が深い人物と考えられる。

坂部善次郎は、禄高800石、同じ名乗りの人物が3名該当し、善次郎直之の没年が文政元年、善次郎が嘉永6年辞職、いま一人の善次郎が、安政2年に寄合の役職に就いている。

土屋源四郎は、源四郎正甫のことと考えられ、禄高500石、寛政11年(1799)に没。

彦坂三大夫は、禄高2,000石、該当者は3名いる。この人物は、子孫のご好意により、史料を拝見させていただいたので、他の旗本より家系の詳細が判明している。「三大夫」を名乗ったのは3名該当し、彦坂家4代目紹芳が文政8年没、5代目紹顕が天保10年没、6代目紹徳が安政2年没である。

岩本石見守は、2,000石、該当は2名で、正五郎正倫は文政4年没、鍔之丞正脩が文政9年職を辞している。

青山牛大夫は、禄高1,200石、牛大夫成昌で、文化11年に没。

斎藤伯耆守は、禄高1,700石、治左衛門利道(始卯八郎)のことで、文化5年から11年まで大坂西町奉行を務め、天保5年没。

本多百助は、百助信用のことで禄高200俵、安政5年に小普請支配の役職に就いている。

進喜太郎は、喜太郎成美で、禄高1,000石、文政5年に役職を辞している。

安藤弥右衛門は、弥右衛門定為のことと考えられ、禄高300俵で、『寛政重修諸家譜』で「未五十」つまり寛政11年に50歳であったとわかる人物である。

小出宮内は、禄高2,000石で、主膳輝英(父)と亀之助英徳(子)が同じ宮内を

通称とした。主膳の辞した年は文化14年、亀之助は文政11年に没。

稲富久兵衛は、該当者2名で、禄高758石、安政2年に大番大久保組にいた人物と、年不明であるが牛込御門内御留守居町に屋敷を構えた人物の2人がいる。

篠山吉之助は、禄高500石、慶応年間(年不明)に家督小普請入した。ただし、この人物は、第85番目「初霜」において、

山中平吉秘蔵ノ花。梅ノ魂出テ平吉大病之節身代リニナリ鉢木枯ル。
地木ハ今ニ有。山中平吉・篠山吉之助兩人ニ二夜翁夢相。吉之助医心アリ。薬ニテ全快長寿セリ。

とあるように、文政10年に存命した山中平吉と同時代の人物なので、慶応年間に家督を継いだ人物とは別人である。国会図書館に篠山吉之助が天明6年(1786)に写した『御伝略』があり、また京都大学附属図書館に同年筆写の『文廟令』があるので、年代ではこちらの人物が該当すると考えられる。

小菅猪右衛門は、禄高1,500石、該当が2名で、猪右衛門正容の没年が文化13年、猪右衛門武寛は没年不明であるが、少なくとも文政12年の時点で没していたと判明している。

大久保矢九郎は、該当人物が3名おり、禄高1,200石、定方の没年が文政3年、勘三郎忠壽の辞職が天保12年、矢九郎が元治元年(1864)辞職。

蜂屋七兵衛は、禄高1,200石、該当者2名で、七兵衛定賢の辞職年は文政2年、七兵衛の辞職年が弘化4年(1847)である。

以上検討した結果をまとめると、該当者が単独であるのは、春田四郎五郎・堀弾正・山中平吉・馬場大助・安倍主膳・土屋源四郎・青山牛太夫・斎藤伯耆守・本多百助・進喜太郎・安藤弥右衛門・篠山吉之助の12名を数え、安政5年に役勤めをしている本多百助以外は、寛政末から文化・文政期に辛うじて存命とみなしてよいだろう。しかし、春田の例で述べたとおり、必ずしも図譜成立と存命の期間が一致しなくてもよく、筆者は、存命期間より図譜成立の方がより時代が新しいと考える。実は、本図譜の成立年代を限定する情報が、第87番目「難波梅」の項に、

享和之^{ころ}比戸田主税助、大坂御目付勤役中得之。

とあり、この記事により少なくとも享和の次の元号、文化年間(1804-18)以降

に成立したのは確実である。また、文化6年成立、春田四郎五郎『韵勝園梅譜』にも記されない梅花も本図譜に見られるため、さらに時代が新しくなると考えられる。本図譜に記載される旗本の役職時期で新しい年代は、安政年間(1854-60)であるが、幅をとっておおよそのところ天保年間(1830-44)以降を、図譜の成立時期としたい。

3. 制作者は誰か

前節で、図譜成立時期を天保年間以降とした理由には、制作者は誰かという問題にも深く関わりがある。国会図書館蔵『公園梅花名寄』【請求記号:特1-1997】には、

文恭公には梅花を愛したまひ数百種をあつめられ上花また奇品と、上意ありし数々の内

として、「文恭公」すなわち徳川11代将軍家斉(1773-1841)の上意により集められた梅花の名鑑がある(図はない)。『公園梅花名寄』には、『韵勝園梅譜』に名がなく、本図譜にある梅花銘が記されている。本図譜において2,000石以上の旗本を、「馬場」「彦坂三太夫」と敬称を付けずに呼び捨てにして記するのは、旗本より身分が上の人物と考えられ、将軍家斉の命で梅花を収集した結果を図譜にしたとするならば、至極納得がいくのである。また、ただ一人身分が低い幕臣の山田平右衛門(安政2年存命)は、「文恭院御代」の文化8年に「太郎稻荷跡」すなわち小石川御薬園の勘定役に就いている⁷ので、本図譜に登場する実務をつかさどったのではないだろうか。家斉の没年が天保11年であり、図譜の成立を天保年間以降としたのはこのためである。

しかしながら、もう一人の制作者の可能性もある。本図譜に名が掲載される彦坂三大夫家のご子孫宅には、天保12年建立の石碑「種梅記碑」の拓本が伝来している。「種梅記碑」は水戸弘道館北方に現存するが、碑表は磨耗して文字の判読は難しい。彦坂家所有の拓本は、非常に状態がよく、文字の区画の境界線さえも鮮やかに写し取られている。碑文の内容は、

7 『改定新版江戸幕臣人名事典』(前掲註3)。

予自少愛梅庭植數十株天保癸巳始就国國中梅樹最少南上之後每歲手自探梅實以輸於国使司園吏種之偕樂園及近郊隙地今茲庚子再就国所種者鬱然成林開華結實適会弘道館新成乃植數千株於其側亦令国中士民每家各植數株夫梅之為物華則冒雪先春為風驗之友實則含酸止渴為軍旅之用嗚呼有備者无患數歲之後文葩布国軍儲亦可充積也孟子不云乎七年之病求三年之艾可不戒哉聊記以示後人云

天保十一年歲次庚子冬十月 景山撰文拜書及篆額

と、天保4年、新しい水戸藩主、徳川斉昭(1800 - 60)が、領内に梅が少ないことを知り、江戸屋敷の梅を集めて水戸に送って育苗したとある。彦坂家は常陸国を知行し、水戸藩上屋敷近くの小石川馬場に居住していたことなどから、水戸藩と交際が深かったことが推測され、これらのことから彦坂家が、藩主斉昭の行った殖産興業の一つ、梅栽培事業に協力した可能性も高い。

本図譜の旧蔵者は、幕府の菓園(小石川植物園)である。地理的には水戸藩上屋敷に近いので斉昭の関与の可能性が高いと思われるが、しかし、小石川菓園が幕府の直轄であるという点では将軍家斉の関連性も甚だ強い。現在のところ、家斉か斉昭かどちらが本図譜を制作したのかの判断はできない。しかし、「種梅記碑」に「軍儲」とあるとおり、梅は、実を食用にできるため兵糧にするという実用的側面があり、これを将軍あるいは御三家当主という為政者が奇しくも同時期に保護し、新品種を積極的に開発させたという動機がわかった点は大きな収穫である。これまで武家の園芸は、趣味的な側面が強調されがちであったが、実用目的のために身分の高い武家が園芸文化に大きく関与した事実が本図譜によって具体的に判明した。同時代には、植木屋が商品として園芸植物を供給してきたが、需給者である武家は春田のような一握りの園芸愛好家だけでなく複数の将軍・藩主・旗本が挙って新花開発に余念がなかったのである。